

巻頭インタビュー：篠塚明彦先生

(筑波大学教授・筑波大学附属桐が丘特別支援学校校長)

# 視

## 点を変える練習をする

今号では、篠塚明彦先生（筑波大学教授）にお話を伺います。

篠塚先生のご経歴と校長先生になられた経緯を教えてください。

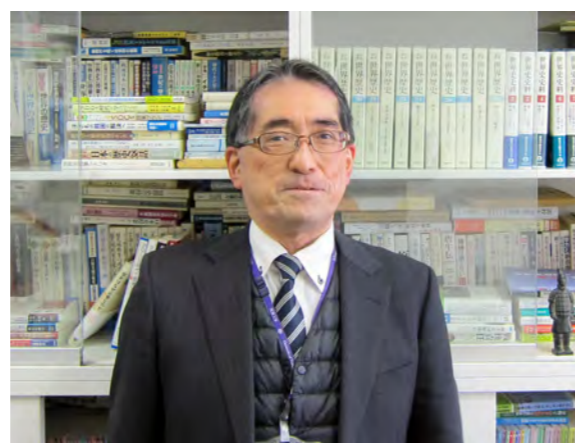
大学で東洋史学（モンゴル史学）を学んだ後、神奈川県の高校で社会科の教員をしていましたが授業づくりについて研究したいと考え、内地留学の制度を使って、2年間、上越教育大学院で学びました。その後、神奈川県の高校に戻り、縁あって附属駒場高校（以下、駒場）の教員になりました。駒場では、社会科の教員として働くとともに、以前に附属学校教育局におられた濱本先生と一緒に野球部の顧問もしました。10年くらい一緒に顧問を務め合宿にも参加しました。駒場には16年いました。今、学校教育局で仕事をされている梶山先生とも一緒でした。

駒場では教科書に関わる仕事もしたのですが、北方史を研究していることが評価され弘前大学に赴任することになりました。それが10年前です。そして、弘前大学教育学部社会科教育講座で学生を教えました。在任9年うちの後半の5年間は、附属中学校の校長と統括校長をしました。学校現場から距離を置くつもりでしたが、またどっぷりつかりました。そして昨年、筑波大学学校教育局の教授と附属桐が丘の校長の辞令を拝命し、こちらで仕事をしています。

ご専門の研究について教えてください。

社会科教育です。世界史が中心ですが、世界史と日本史を別々に教えていることに疑問を感じていました。日本は世界の一部ですから、それぞれを結び付けるような歴史教育の在り方を考えていました。日本をよく見てみると、地方によって大きな違いがあります。教科書の中の日本の扱いはこれでいいの。日本と世界を結び付けて、日本の歴史の見方も考えなくてはならないと考えました。

1996年10月に世界史の未履修問題が起こります。必修なのに履修していない学校が日本中のいたるところで出てきました。なぜそんなことになったのかと考えました。入試科目として高校生はあまり必要性を感じないし、そうすると先生たちも教える意味が見つからない。それでは世界史は嫌がら



れます。当然の帰結とも言えますが、なぜそんな科目になってしまったのか。学校の歴史教育の何がおかしいのか。また、こんな方法で授業をすればいいのではないかなど、様々な視点を持つようになりまして。きっかけとしては、やはり上越教育大学院で学んだことが大きいと思います。

そもそもなぜ世界史に興味をもたれたのですか。

自分のルーツ探しというか、自分はどこから来たのだろう。日本人のルーツはどこにあるのだろう。この文化はもともとはどこで生まれたのだろうということに、高校生のころから興味がありました。中国かな、でも言葉を考えるとモンゴルの方が近いぞ、ということでモンゴル史に行き着きました。

さて、桐が丘特別支援学校に赴任されて何かお感じですか。具体的に教えてください。

学校のシステムからしても全く違います。同じ筑波の附属でも、校内人事の進め方、様々な手続き、決まり事がこんなにも違うんだと思いました。弘前とも違います。良く解釈すれば、どこも違うということが附属の唯一の共通点かもしれませんが。

しかし、子供たちは同じだと思います。純粋だし、子供たちと話をするとほっとします。内面の豊かなところ、特に、これまであまり接する機会がなかった小学生の低学年の姿は可愛らしくてしょうがないです。生意気なことでも一生懸命に言ってくれる姿、手を抜くと言う概念すらないのでしょね。ひたむきになっている姿にほっとします。大人の打算がないです。精神面もそうですし、人間の成長について様々な側面の発達を見て取れるのがとても興味深いです。教育があることによって人が成長するのだ

## それがインクルーシブ教育につながるのでは…

ということが実感されます。そして、改めて教育の大切さ、と同時にある意味での恐ろしさを感じます。教育の現場には安易な姿勢で携わってはならないという責任を感じさせられました。しっかりとした構えや覚悟が必要な世界です。

桐が丘の建物が新しいせいもありますが、「バリアフリー」の考え方が少しずつ分かってきました。広々としていてすごく気持ちがいいんです。子供たちが過ごしやすい空間が、私たちにとっても過ごしやすく感じられます。子供たちの視点を生かすことがとても大事だと思いました。インクルーシブ教育と言いますが、何かしてあげるとか、支援するとかではなく、子供たちの意見と同じような立ち位置で「そうだね。よく気が付くね」という形で、こちらも教えてもらう。そういうことが当たり前の事として、なんの意識もせずに行われていくのが良いと思います。また、その声を社会が当たり前の事として受け止められるようになることが大切だと思います。障害がある子供たちにとって、社会が窮屈ではないと思えば、きっと大勢の人たちにとって窮屈でなくなるはずですよ。だとするならば、子供たちの声こそがいろんな意味で社会を変える一つの鍵になるのではないかと思います。桐が丘に赴任してから、そういうことを考えるようになり、社会の在り方に一層興味を持つようになりました。

また、知的障害の学校に対して、教科の学習の大切さが言われるようになりましたが、それぞれの教科にはどのような意味があるのか。社会科、国語、英語等、当たり前だと思っていますが、その必要性はどこにあるのか。教科の学習の意味は、突き詰めて考えると、なぜ普通附属で社会科を教えているのか、という問題に重なります。

教科の学習内容はツールだと思っています。社会科「で」教える、社会科「で」学ぶということです。社会科「を」教える、社会科「を」学ぶということが目的ではありません。教科ありきでは意味がありません。世界史「を」教える、世界史「を」学ぶ、から未履修になる。なぜ必要なのということを考えてはなりません。なぜ社会科があるのかを強く意識するようになりました。

校長としてこれから取り組んでいきたいことは何ですか。

今、行っている遠隔合同授業など、いろいろな



取組を継続していく必要があります。教科教育は私のアイデンティティです。さらに、どうすれば子供たちの声を社会に伝えられるか。社会参画ということ。社会参画の具体的な在り方について考えを深めていく必要があります。

特別支援教育について期待されることを教えてください。

特別支援教育というか、インクルーシブ教育に期待することは、特別支援学校側の努力やアクションは大事ですが、特別支援学校だけでできるわけではなく、むしろ普通附属も巻き込んで変わっていく必要があると思います。ぜひ、普通附属と一緒に取り組めるように進めていただけたらと思います。それに関して微力ながら尽力したいと思います。

インタビューを終えて

好奇心あふれる研究者としてお姿が印象的でしたが、教科指導に携わる教師としてのお顔が垣間見えました。「これでいいの?」「どうしてこうなったの?」と、学校現場で起きていることを突き詰めて考えていかれているご様子に、子供たちや現場の先生たちに真摯に向かう篠塚先生の芯の強さを感じました。

このインタビューは2023年1月に篠塚先生の研究室（附属学校教育局）で行われました。

(聞き手：連携推進グループ 高尾政代)

## 附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取り組みがたくさんあります。

### 「夢は知識」 自立と社会参加を支援する

附属大塚特別支援学校に長年勤務され、人事交流で千葉県の特別支援学校も経験された宇佐美太郎先生に、お話を伺いました。

進路指導や ICT 教育、木工、エアロビなど、多才な宇佐美先生ですが、これまでの勤務の中で、大切にされてきた考え方や、力を注いだ取り組みや業務について、お聞かせください。

知的障害という障害に対して、まっすぐに向き合っていきたいと考え、常に実践を続けてきました。知的障害は、肢体不自由や聴覚障害、視覚障害などと違って、非常に分かり難くまた、理解もされ難いという障害であり、我々にも理解しにくい部分が多々あります。未だに、知的障害については、言葉での明確な定義がなされていないというのが現状です。だからこそ、知的障害の子ども達に対して、将来、自立と社会参加という大きな目標に向かっていくための力を育ててあげたいと考えています。この点については、高等部で進路指導を担当していた時に、とても大切にしてきたことです。また、妹がダウン症であり、当事者の家族としての思いも込めて、これからもブレないで、貫いていきたいと思っています。

こんな思いを持ちながら、高等部の研究として、子どもの願いを聞き取り、自分の夢や願いを図で表したドリームマップを作成しました。将来の夢についての調査では、高等部の生徒と本校の教員や保護者にもご協力頂きました。調査の中で、知的障害のある生徒達は、自分にとっての身近なものや経験のある事柄のみが、直接、将来の夢につながっていることが分かりました。

私は、知的障害の子ども達にとって「夢は



知識」であると思っています。ある生徒との進路学習について、お話しします。声優になりたいという夢をドリームマップに書いた生徒がいました。そこで、どうしたら声優になれるのかということ、生徒と一緒に考えました。どうしたらなるのかを調べる中で、世の中には声優になりたいけれど、なかなか成れない人が、たくさんいることを知りました。そこで、声優コースのある専門学校へ見学に行きました。また、体験会へも参加し、専門学校の先生に面談をしていただきました。面接の中で、その生徒は、声優ではなかなか食べていけない、声優になるには、学費などお金がかかるということを実感しました。そこで、インターネットで検索して、声優になるためには、いくらぐらいのお金がかかるのを調べ、例えば専門学校へ通うためには夜間コースでも、かなり高額なお金がかかることを知りました。

これらの学習の結果、三者面談では、声優になりたい→声優になるためにはお金がかかる→だから働いてお金を稼ぎたい→働くためには対人関係の課題を頑張りたいという、現実的な自分の目標に向き合うことができました。そして、その後の現場実習では、分からないことは自分から聞きに行くなど、かねてから指摘されていたコミュニケーションの課題



(ミライの体育館)

に、自分から積極的に向き合い、努力するようになりました。この経験を経て、今では立派に進路先の企業で働いています。また、声優は趣味として続けていきたいと考えようになったようでした。

これらの素敵な指導経験や研究成果が、大塚祭での「ミライの体育館」を使った花帯ファッションショー等の授業につながっているのですね。ミライの体育館の取り組みについてお聞かせください。

「ミライの体育館」を使った指導では、中学部・高等部のスキー合宿の事前学習として、大きなすごろくを作って体育館の床面に写し、スキー合宿に行くまでの道のりを、ポイントごとに設問に答える形で行程を学ぶ学習として進めました。事前に、実際のスキー合宿を想定した学習をゲーム的に行ったことにより、生徒たちは、本番でも戸惑うことなく行動することができ、合宿を楽しむことができました。

大塚祭では、花帯を結ぶことができる着付け師に浴衣を着せてもらい、それぞれの花で、「ミライの体育館」によって体育館の床にダイナミックに映し出されたランウェイを歩く経験をしました。「ミライの体育館」の舞台効果に背中を押され、生徒たちが華々しく、誇らしげに、背筋を伸ばしてランウェイを歩きました。普段、支援される側である知的障害のある生徒たちが主役となり、注目を浴びたり、声援を受けたりする経験を通して、生徒自身が自己肯定感の高まりを感じることができたのではないかと思います。今では、小・中学部の後輩が憧れる行事の一つになっています。

授業のアイデアを考える時に、子どもたちの動きや表現に、少しでも味付けをして、素敵に見せる工夫をしています。簡単な動きをくりかえし行うことで、覚えて自信を持って行える、そしてそれが見栄え良く仕上がるように工夫しています。

「鬼ボウリング」では、数や簡単な計算が、タッチパネルによって学べるように工夫して作っています。特別支援学校の数の概念の獲得の授業では、題材として使われることの多いボウリングですが、そのボウリングにパワーポイントで作った鬼のプレゼンテーションを加えるだけで、生徒たちがとても意欲的に学習するようになります。また、タッチパネルなどを用いて子ども達が自分で操作し、すぐにレスポンスが返ってくると、学習意欲が喚起されます。さらに教師の出番を減らし、子ども達が様々な操作を行うことができると、多くの子ども達に役割ができて、主体的に楽しんで、学習することができます。これからも、様々な工夫をしながら、楽しく学べる教材を作っていきたいです。

「夢は知識」。子ども達の自立と社会参加を目指して、これからも楽しい授業や教材を工夫していきたいと思っています。



(聞き手：連携推進グループ 根岸由香)

## 令和4年度「特別支援教育研究セミナー」について

筑波大学人間系インクルーシブ教育システム開発リサーチユニットと当連携推進グループ共催の「特別支援教育研究セミナー」をオンデマンド配信（令和5年2月1日～28日）で開催しました。

今回は、「インクルーシブ教育システム下におけるICT活用～GIGAスクール構想の今と今後の可能性～」のテーマで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたICTの最大限の活用について、基調講演、実践発表、パネルディスカッションの3つのコンテンツを配信しました。

基調講演では、「GIGAスクール構想とは～現在の状況と今後の可能性について～」のテーマで、東京都立久我山青光学園統括校長の丹野哲也先生からご講演いただきました。丹野先生は学習指導要領の改定にも関わっていますが、ICT機器の活用に関する理念、方向性や背景をお話いただき、東京都の取り組み、また先進的な取り組みをしている学校の実践例についてもご紹介いただきました。

実践発表では、附属桐が丘特別支援学校、附属大塚特別支援学校、北海道新篠津高等養護学校の先生方からそれぞれの実情や背景に合わせた指導の実践や工夫についてお話いただきました。北海道新篠津高等養護学校の八木郁朗先生はかつて当グループの現職教員研修に参加されていた先生です。パネルディスカッションでは附属5校の先生方にそれぞれの学校のお子さんの障害の特性等に応じたICT機器の活用のあり方について専門の立場からディスカッションをしていただきました。



丹野哲也先生



パネルディスカッションの様子

## 第3回 教材・指導法データベースコンテストについて

当グループは、附属特別支援学校5校・特別支援教育連携推進グループ・人間系障害科学域の協働による「筑波大学 特別支援教育 教材・指導法データベース」を運営しています。

このデータベースを国内外の方々に広く活用していただくことができるように、年に1度のペースで、5つの附属特別支援学校の教職員から教材・指導法を募集し、コンテストを行っています。最優秀賞には、当グループの事業を支援していただいている、株式会社木村牧場（青森県つがる市）のお名前を付けていただいています。本年度は49点の応募がありました。1次審査はグループ員が行い、2次審査は、筑波大学人間系障害科学域の先生、5附属の校長・副校長、5附属連絡会議構成員が投票を行いました。3次審査は、附属学校教育局長・次長・教育長補佐の3人が行い、その結果、優秀賞3点が決定しました。

①『つけかえできるマグネットカレンダー 今日は何月・何日・何曜日・天気は…?』

附属視覚特別支援学校 小学部図画工作科 代表：佐藤 直子

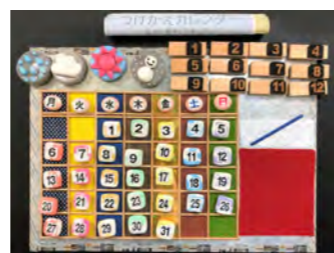
②『引っ張りボウリング』

附属久里浜特別支援学校 五反田 明日見

③『文京区のハザードマップを確認しよう』

附属大塚特別支援学校 飯島 徹

（つけかえできるマグネットカレンダー）



コンテストを通して、データベースに560の教材を掲載することができました。皆様に広く活用していただけるように、忌憚のないご意見やご感想をお寄せいただくと幸いです。ホームページ末にある「ご感想はこちらから」をクリックしてご記入ください。

## 令和4年度 現職教員研修について



修了証書を授与された中島恵先生



修了証書を授与された澤田佳菜子先生

今年度、連携推進グループでは、全国から4人の先生方の研修をお受けしました。当グループの現職教員研修には、専門性向上力研修（1年間・6か月間）と指導力向上研修（3か月・1か月）の2つがあります。研修期間によって講義・演習、学校や関係機関の見学の違いなどがありますが、どちらも5つの附属特別支援学校（附属視覚・附属聴覚・附属大塚・附属桐が丘・附属久里浜）で、現場の幼児児童生徒や教職員との関わり、授業研究などを中心として進めていくのが大きな特徴です。

4月より専門性向上研修（1年間）に、北海道旭川高等支援学校の中島恵先生が取り組まれました。1学期は附属大塚で、2学期は附属視覚で実践実習をされました。また、附属視覚での実習中は寄宿舎で寄宿舎生と共に生活をされ、これまでとは違った角度から生徒理解を深められていきました。3月末にはこの1年間の研修を「児童・生徒が安心して学べる環境作り～校内支援をベースにチームアプローチの視点を活かして～」というテーマでまとめられました。

同じく4月から専門性向上力研修（6か月）に、埼玉県立日高特別支援学校の新井幸子先生が附属桐が丘と附属視覚で実践実習に取り組まれました。研究テーマは「自立活動を主とした教育課程における教科指導の実践～各教科で育成を目指す資質・能力を踏まえた単元づくり～」でした。附属桐が丘では体育の研究授業をされるなどして、実際の授業づくりを通して研究を進められました。

10月には、指導力向上研修（1か月）として、青森県立青森第二養護学校の三上亨先生が附属大塚で実習を進められ、ご自身の研究テーマであった「生徒の実態と指導内容の関連性」についてまとめられました。11月からは、指導力向上研修（3か月）に、鳥取県立鳥取聾学校の澤田佳菜子先生が取り組まれ、附属聴覚での実践実習を通して、「聴覚障害のある生徒の障害認識～筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部における防災教育の実践を通して～」のテーマで、3月2日に成果報告会を行いました。

## 5 附属連絡会について

今年度、5附属連絡会議では、筑波大学附属の特別支援学校5校の構成員の先生方にご参加いただき、各附属校での指導や支援の実践についての情報交換会と、「インクルーシブ教育システム下で生きる教材」についての自由討論を実施してきました。各学校に在籍する児童生徒の特性や学習の様子などについて情報交換し、教材や指導、支援について各障害種の専門的な視点から様々な意見交換をいただきました。

3月の第7回5附属連絡会議では、附属桐が丘特別支援学校の竹田先生から、「移動力の向上を目指して～電動車いす教程シートの活用～」、附属久里浜特別支援学校の佐東先生から「スケジュールの活用」についてご紹介されました。

電動車いす教程シートについては、①肢体不自由児の状態と生きにくさについての説明、次に②「教程シートについての説明」がありました。この「教程シート」には、電動車いすの運転に必要な項目が、わかりやすく書かれていて、チェックシートを活用することで、安全な乗り方を学習することができます。指導効果として、自分の姿を映像で見て、シートで確認をすることにより、スロープを斜めに曲がることは危険などの改善点を理解することができたという報告がありました。この「チェックシート」を使用することで、指導者が変わっても、一定の指導方法が担保できるようになるとのことでした。

# editorial Postscript

編 集 後 記

寒さの厳しかった今年の冬ですが、3月に入ると気温がどんどん上がりだし、教育の森公園の桜も開花し始めました。いよいよ花たちが咲き誇る本格的な春の訪れです。

そして、春は門出の季節。各附属校でも卒業式、修了式が行われました。児童生徒たちが心に新しい夢と希望を抱きながら4月からの生活に臨みます。

ここ、連携推進グループでも、今年4回目の修了式が終わり、最後まで残っていた研修生が北海道に帰還する準備を進めています。1年間の長い研修でしたが本当にお疲れさまでした。研修で学んだことや経験をぜひこれからの指導に生かしてください。益々のご活躍を祈念しております。

(橋本時浩)



(東京キャンパス：教育の森公園から)

表紙：オマージュ・筑波大学附属学校教育局

# SNE-T

Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

エスネット16号（通巻第64号）2023年3月27日発行  
発行/編集：筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ  
〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1  
電話：03-3942-6923・6937 FAX：03-3942-6938  
e-mail：snerc@gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp  
http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/

©2022 筑波大学特別支援教育連携推進グループ（本誌記事の無断転載を禁じます）

# SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

№ 16  
2023.03

